

社会学共創活動の社会的インパクト評価



巻頭言

西森年寿*

Assessing the social impact of university-community co-creation

Key Words : University-Community Co-creation, Social Impact

現在、大阪大学人間科学研究科では、大学のOUマスタープラン実現加速事業の援助を受け、「OU版社会学共創エコシステムの構築」(通称Project IMPACT)に取り組んでいます。このプロジェクトは、私たちが大学で行う社会学共創活動の社会的インパクトを測定し、可視化することで、社会からの信頼を獲得し、さらなる資源を呼び込み、次なる活動へと繋がる好循環を生み出す仕組みを整備することを目的としています。

社会的インパクトとは、例えば、単なるイベント開催報告や参加者数の報告に留まらず、「来場者にどのような影響を与えたか」「行動にどのような変化をもたらしたか」といった成果を示すものです。同じく成果を表すアウトカムという言葉と比較すると、インパクトはより中長期的な視点からの成果を指すようです。

人間科学研究科では、その理念の一つに「実践性」を掲げています。教職員や学生によって社会の様々な場面での実践活動がなされてきました。しかし、複雑で難解な社会問題の解決を目指す実践においては、大学側が正解や解法を一方向的に提示し適用するモデルは機能しません。解決には、社会の様々な団体、組織、人々との連携による、共に答えを創り出す共創というモデルが不可欠です。私たちの研究科の附属未来共創センターの名称は、そのような考えを表しています。

社会学共創活動は、関係者間の複雑で固有のネットワークを形成し、状況や、それに取り組む人間の個性を大きく反映して展開していきます。その過程で、参加者自身や問題そのものが変化します。したがって、大学側が事前に設定した特定の目標値の達成度だけでインパクトを測ることは不十分な場合が多く、インパクトをどのように捉え、評価するかという方法を丁寧に考案する必要があります。そのためか、活動の推進者自身でさえ、社会学共創活動を通してどのような成果(インパクト)が生まれているのかを十分に把握できていない部分があったのではないかと。加えて、研究科としてそのような成果を広く社会に発信することも十分にはできていなかった。インパクトを測定し、効果的に伝えるためには、いわば開発すべき「技術」がありそうだ。これは、私が研究科長としてこの事業に取り組み始めたことで改めて認識した点です。

とはいえ、具体的にやれそうな方法は奇抜なものではなく、地道な資料集めや、関係者へのインタビューを積み重ねていくことになると考えています。現在、Project IMPACTのスタッフには、パイロットケースとして、特定の社会学共創活動にかかわる評価に着手してもらっていますが、その途中報告はとても刺激を与えてくれるものでした。活動に参画いただいた様々な立場の方が、インタビューを通して、活動の中での出会いや経験を、自分の言葉で意味づけてくださいました。ある人は、その経験や大学の存在と、自分の中にあつたニーズを結び付けておられました。また、ある人は私が(たぶんその活動の主担当者も)想像もしなかった心のうちの変化を語ってくださっていました。少し強引かもしれませんが、社会学共創活動への参画を通して、私たちがふくめ、みなさんが見つけれられたものは、大阪大学がマスタープランに掲げる「生きがい」だったと言えるのではないかと私は考えています。



* Toshihisa NISHIMORI

1972年10月生まれ
大阪大学大学院 人間科学研究科 博士
後期課程 単位取得退学(2002年)
現在、大阪大学 人間科学研究科
研究科長・教授 博士(人間科学)
専門/教育学
TEL : 06-6879-8123
E-mail : nisimori.hus@osaka-u.ac.jp